



講習によるモラル向上で「移動」を楽しませる

セグウェイジャパン『セグウェイ』

乗った人誰もがセグウェイ・スマイルに

セグウェイジャパン株式会社取締役マーケティング部長の秋元氏は「セグウェイに乗ると、乗った人のコミュニケーション能力が上がる」と語る。

「セグウェイ」は楽しい状況下で乗る、楽しい乗り物だ。道行く人から話しかけられることも多い。すると乗った人はますます楽しくなり、ほがらかになり、挨拶し、にっこり笑うようになる。同社はこれを「セグウェイ・スマイル」と呼んでいる。世界中で同じような傾向があるという。

快活に、仲間や家族とゆったり語らいながらセグウェイでの移動を楽しむ人たちは決して急がない。いわば移動を楽しむ。進行ルート上に誰かが飛び出してきても、にっこり笑って道を譲る心の余裕を持っている。「セグウェイ」は、人のモビリティ能力だけではなく、マナーやモラルをも良い方に拡張する乗り物だという。

安全性は運用面で確保する

セグウェイのような「搭乗型ロボット」の安全性は、製造物としての安全技術だけではなく、運用で確保するほうが効率的だというのが秋元氏ら、セグウェイジャパン社の考え方だ。

秋元氏は「我々の講習をきちんと受けた人は、危険な振舞いはしなくなります。そのほうが得で、楽しいからです。人は自分が損したり、つまらなくなったりする振舞いはしないものです。一度、僕の講習を受けて、乗ってみれば分かります」と自信たっぷりに語った。

現在、セグウェイは日本では道路交通法上、公道を走行できないし価格も高い。だが、誰もが自転車やスクーターのように当たり前にセグウェイに乗れる時代が来たら、さすがにみんなが「セグウェイ・スマイル」ではいられなくなるのではないだろうか？

だが秋元氏は「セグウェイを原付のように誰もが公道で乗れる乗り物にすることは全く望んでいない」と語る。あくまで観光地や離島、あるいは特定の市街地などの限定的な空間で、講習を受けた人だけが乗ったほうが良いと考えているという。

「そもそも、そのような乗り物をモノとして売るのであれば、最初からスクーターや電気自動車を買っていますよ」と鼻で笑われた。同社が考えるセグウェイ事業とはそういうものではないという。

安全性に関しても「そのロボットの目的を理解されたうえで、どこまでリスクアセスメントすべきかを考えたほうがいい」という。「だから、先にサービスがデザインされたほうがいいと我々はずっと申し上げているんです」

そもそも、もしも、法的に許可されたとしても、セグウェイがスクーターや自動車のような従来の移動手段のように選択されるとは思っていないという。

詳細は後述する。技術指向ではなくサービス指向の同社の視点は、ロボットや電気自動車など新しいモビリティの開発を考えている読者には参考になるだろう。

セグウェイのラインナップとその特徴

セグウェイジャパン社は、米国 Segway 社が開発・販売している立ち乗り電動二輪車「セグウェイ」の国内事業を本格的に展開することを目的とした会社だ。2009年5月から同社が国内正規総販売代理店となって事業を行っている。

名前は「セグウェイジャパン」だが、米国 Segway 社の日本支社ではなく、両社の間には資本関係もない。将来は「セグウェイ」以外の搭乗型ロボットの利用も視野に入れており、主眼はあくまで、知的なインターフェースを備えた新たなモビリティを利用したサービスの提案にある。

セグウェイジャパンは、「セグウェイ」本体を製造しているわけではない。セグウェイ本体や保険の代理店販売、講習、そしてセグウェイを使ったサービスを提案・販売している会社だ。よって、製造物責任(PL)に関する事柄は米国 Segway 社の問題ということになる。

ここでいったん、ハードウェアとしての「セグウェイ」についてもおさえておこう。

「セグウェイ」は発明家のディーン・カーメンによって開発され、2001年12月に発表された立ち乗り電動二輪車だ。2005年11月16日に行われた日米首脳会談のときには、ブッシュ大統領が小泉総理大臣(当時)にプレゼントしたことも知られている。

一人乗りで、搭乗者は平行して配置された2輪の間に渡された板の上立つ。前進後退、加速減速はすべて前後への軽い体重移動によって行われ、ハンドルにはブレーキもアクセルもない。ターン操作はハンドルを倒す「LeanSteer」と呼ぶ機構によって行う。

操作は直感的で、自分自身の重心移動に即座に応じてセグウェイそのものも加減速するため体を置いていかれる違和感や、それに伴う恐怖感のようなものがほとんどないのが特徴